

2015年7月25日

# 公文書館の活用術！

館所蔵資料で知る「いたばしの学校」



明星大学人文学部人間社会学科准教授

熊本 博之（専門社会調査士）

## はじめに

板橋区は、東京 23 区で公文書館を設置している唯一の区です。これは板橋区民のみなさんにとって、とても幸福なことです。なぜならみなさんは、他の公文書館を設置していない自治体（都道府県や市区町村のこと）の住民よりも、自分たちの地域のことを知るチャンスに恵まれているのですから。

しかし、いかにチャンスに恵まれているといっても、それを活かす方法を知らなければ、まさに「宝のもちぐされ」です。そこで今日はみなさんに、社会学者、専門社会調査士<sup>1</sup>の立場から、板橋区公文書館を上手に利用するための活用術についておはなしします。

### ☆社会学ってどんな学問？

社会学は、その名のとおり、社会について勉強する学問です。といっても、みなさんが学校で教わっている「社会科」とは少し違います。社会学では社会を「人間関係があわさってできたもの」と考えています。そして、社会で起きている様々な問題について、「なぜ人間がつくっている社会においてそのような問題がおきるのだろうか？」というふうに考えながら、その理由を探していく学問、それが社会学です。

### 【活用術之零】 調べ物をするときの基本を押さえる！

#### ・その情報は正しい情報ですか？

世の中にはたくさんの情報が溢れています。しかしその情報が「正しい」情報であるかどうかは、簡単にはわかりません。特にインターネット上にある情報は、

- ①誰が書いているか特定するのがむずかしい
- ②いつ情報が更新される（書きかえられる）、消されるかわからない

という問題点があります。

なぜならインターネットでは、ちょっとした知識と設備があれば、誰でも情報を発信することができるからです。

つまりインターネットにある情報は、情報の（ ）が低いものが多いのです。



#### ・信頼できる情報源にあたろう！

だから、何かを調べて正しく理解するためには、なるべく信頼できる情報源にあたる必要があります。では信頼できる情報源とは何か？その条件は大きく2つあります。

##### [条件①]

誰（個人・団体）が、いつ、何に、どういう目的で書いたものかがわかる。

##### [条件②]

記録されている情報を簡単には書きかえることができない。

<sup>1</sup> 社会調査士とは、社会調査の知識や技術を用いて、世論や市場動向、社会事象等をとらえることのできる能力を有する「調査の専門家」のことです。

条件①に書いてあるような情報がわかることによって、その情報がどれくらい信頼できるか、どれくらいの「かたより」があるのかを判断することができます。マンガよりも新聞の方が信頼度は高いでしょうし、原子力発電所の建設に関する文書でも、建設しようとしている側の人たちが書いたのか、建設予定地の住民が書いたのかによって、内容にかたよりがうまれます。地震についての文章でも、2011年3月11日より以前に書かれた文章と後に書かれた文章では、かなり意味が違っているはずです。こうやって「情報の来歴」に着目することで、その情報の信頼度を判断することができるのです。

条件②を満たす情報のなかでもっとも一般的なものは、紙に印刷された情報です。特に書籍は、そう簡単には書きかえできません。

インターネット上の情報は[条件①]については満たしているものもありますが、[条件②]についてはむしろ反対の特徴を有しています。情報の書きかえが簡単にできるということは、新しい情報を次々と追加していくことができるという意味ではメリットといえますが、情報の信頼性という点においては、マイナスに働くこともあるのです。

→Wikipedia（ウィキペディア）

だからといって「インターネットは信用ならない」というわけではありません。インターネットは、どこにどのような情報があるのか、つまり情報の「ありか」を探すのには適しています。

そうやって情報の「ありか」がわかったら、その情報の「ゲンブツ」である、紙に書かれた文書にあたることで、情報の根拠を固めることができます。

そして公文書館には、情報の「ゲンブツ」がたくさん収められているのです。

## 【活用術之壱】 ココにしかない情報を知る！

### ① 過去の行政刊行物

各自治体（都道府県や市区町村のこと）ではさまざまな情報をホームページに掲載しています。でもホームページにあるのはここ数年の情報ばかり。図書館にも自治体が作成した報告書が集められていますが、どんどん新しい報告書が増えていくので、古いものから順に捨てていかなければなりません。



これに対して公文書館には、自治体が発行した刊行物が、古いものから新しいものまでそろっています。古いものでは、昭和7年（1932）10月1日に板橋区が誕生してから最初につくられた統計資料で、区長をはじめとする様々な役職者の氏名や、当時の人口、産業の状況などが記録されている、昭和8年度の『板橋区勢要覧』や、戦時中に回覧された回覧板などをまとめて収載している『回覧板』なんていう珍しいものもあります。

## ②行政機関が作成した公文書

区役所など、行政機関の職員が作成した文書のことを（ ）といいます。行政機関は、何か活動を行うとき、必ず文書を作成しなければなりません。行政機関は、みなさんから預かった税金を元に活動しているので、どういう理由で、どういう活動を、誰が、いつ、どこで行うのか、そして誰がその活動を許可したのか、きちんと文書で証拠として残しておかなければならないからです。

ですが、そうやって作成された公文書のすべてを役所に保管しておくことは、保管スペースの問題等もあり困難です。そのため公文書には、その重要性に応じて、1年とか3年とかの保存期間が定められています。そして保存期間を過ぎた公文書は捨てられてしまいます。

しかし、こうした公文書のなかには、区民の文化財産として歴史的な価値を持っているものや、過去の資料として役所を運営していくうえで必要なものもあります。そこで板橋区公文書館では、それらの重要な公文書を選びだし、集めて、担当課ごとに分類して保管しているのです。

なお、詳しい選別基準については、『板橋区公文書館 10年のあゆみ』42～45ページをご覧ください（板橋区公文書館ホームページからPDFファイルで入手できます）。

## ② 板橋の古い写真

板橋区公文書館には、過去の板橋区の様子を撮影した写真がたくさん保管されています。もっとも多いのは昭和30年代～50年代の写真ですが、なかには大正・昭和初期の写真も残っています。また、航空写真も多数あります。

古い写真は、当時の社会のようすが記録されている「記憶の宝庫」です。どこにどんなお店があったのか、お店ではどんなものが売られていたのか、田んぼや畑はどれくらいあったのか、などといった様々な時代の記憶が残されています。

なおこれらの写真は、所定の手続きを経ることで、すべて無料でつかうことができます。たとえば、大山を中心とする板橋の街を紹介する情報誌『大山 Walker』（2013年発刊）には、「大山ヒストリー」のなかに、公文書館所蔵の写真資料が活用されています。

## ④櫻井徳太郎文庫

櫻井徳太郎文庫は、板橋区に長年在住し「板橋区史」の編さんを統括、また文化財保護審議会会長としても活躍され、日本民俗学の大家として知られた故櫻井徳太郎氏が、平成14年（2002）に板橋区へ寄贈された蔵書等、約3万8千点余の資料群のことです。

学術書、学術雑誌、古文書、和本、民俗調査の「聞き取り」内容を記したフィールドノート、話者とのやり取りの内容を録音したカセットテープ（CD化済）、写真、スクラップブック、ビデオテープなど多種多様な資料が収められており、一部を除き公開されています。

この櫻井徳太郎文庫は、もちろん資料的価値も非常に高いのですが、1人の優れた研究者がどのように情報を集めていたのか（知の体系！）を知ることができるという点でも、たいへん重要な施設です。

#### ⑤板橋区のことをよく知っているスタッフ

板橋区公文書館にいるスタッフのほとんどは、区役所の職員およびそのOB・OGです。長く板橋区で働いてきたスタッフの方たちの知識は、板橋について調べる上での貴重な財産です。そして歴史学を専門に学んできたスタッフもいるので、どうやって歴史を調べればいかも教えてくれます。古い古文書だって読んでくれますよ。

何か調べたいことがあれば、まずはスタッフの方に声をかけてください。適切な資料をいっしょに探してくれますよ。

#### 【活用術之弐】 公文書館で効率的に集めることのできる情報を知る！

板橋区公文書館には、実はこんな資料もそろっています。

- ・過去から現在にいたるまでの住宅地図
- ・『広報 いたばし』のバックナンバー（平成18年度以降のものは板橋区HPでも閲覧可）
- ・日本史を調べるための基礎となる辞典類、書籍

例えば住宅地図は、自分が住んでいるところにかつて何があったのかといったことを調べるのに便利ですし、『広報 いたばし』のバックナンバーには、板橋区であったイベントや板橋区によるさまざまな取り組みについての情報がたくさんついています。

## 【活用術之参】 具体的なテーマについて調べてみる！

このあと、みなさんには実際に公文書館所蔵の資料を用いて、いくつかの「いたばしの学校」について調べてもらいます。そのまえにここで、「いたばしの学校」全体の歴史、現在、そして未来について、館所蔵資料に基づきながら概説していきます。

### 1. 「いたばしの学校」の歴史

【参照資料】『板橋区教育百年のあゆみ（改訂縮刷版）』（板橋区教育委員会、1974年刊）

#### （1）寺子屋から学校へ

・明治5年（1872）、学制発布

これによって、現在の板橋区内にあった31の（ ）は廃止される。

※ただし公立学校や私立学校に衣替えした寺子屋もあったし、寺子屋の師匠が教員に採用されることも多かった。

・板橋区内にできた最初の公立学校は、明治7年（1874）7月12日に設立された「板橋学校」で、続いて8月25日には「紅梅学校」が設立された。

①板橋学校：現在の（ ）小学校

下板橋宿山中1669番地（現在の仲町44番地）にあった香林庵（現在は専称院）を仮の校舎として、生徒数52名で発足。

→その後、何度か移転し、現在の板橋第一小学校がある場所に移ってきたのは明治40年（1907）5月25日。

②紅梅学校：現在の（ ）小学校

徳丸本村9番地（現在の徳丸8丁目9番地）にあった紅梅山安楽寺に、旧名主であった粕谷米次郎が付近にあった3つの寺子屋を集めて私立学校「紅梅学校」（明治7年7月19日設立認可）を設立する。その翌月である8月25日に公立学校に改められた。

その後、何度か移転し、現在の紅梅小学校がある場所に移ってきたのは明治22年（1889）4月22日。

→両校とも、昨年創立（ ）周年を迎えている。

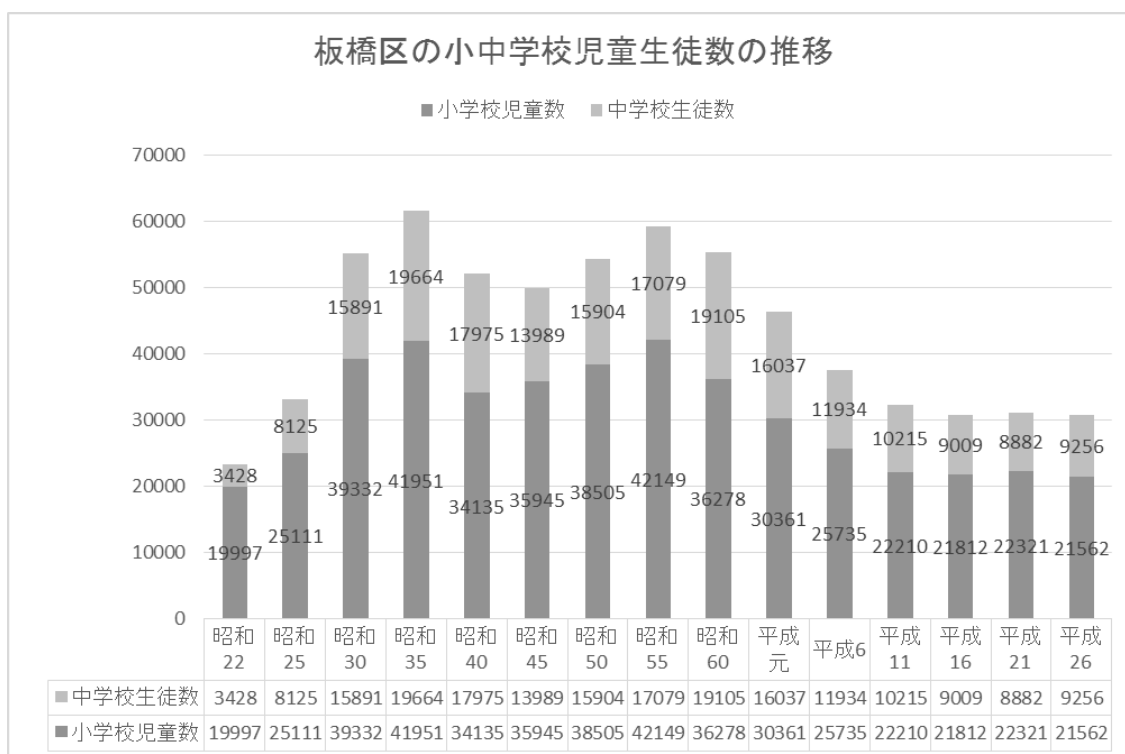
#### （2）戦後の学校

昭和22年（1947）4月1日、新学制がはじまり、現在の小学校6年・中学校3年・高等学校3年の6・3・3制が確立する。板橋にも新制中学11校が新設されたが、そのスタートは5月1日。

→なぜ一カ月おくれたのか？

戦災によって焼失したり破損したりした校舎の復旧が間に合わなかったため。実際、11校すべてが近隣の小学校等の教室を借用して開校している。

### (3) 戦後から現在までの小中学校児童生徒数（公立校）のうつりかわり



・新学制がはじまった昭和 22 年ではあわせて約 23,000 人だった小中学生数は、昭和 30 年には約 55,000 人と約 ( 2.4 ) 倍に増えている。

←戦後の復興期における板橋区の人口増の影響

・第一のピークは昭和 35 年 (1960)

1947～1949 年生まれの第一次ベビーブーマー (団塊の世代) が小中学生になったころ。

・第二のピークは昭和 55 年 (1980)

1971～1974 年生まれの第二次ベビーブーマー (団塊ジュニア) が小学生になったころ。

←中学生のピークは昭和 60 年 (1985) であり、これは団塊ジュニアがちょうど中学生になった時期にあたる。

・その後は急激に減少。平成 16 年 (2004) 以降は 30,000 人を少し超えるくらいで一定している。これは昭和 25 年と同じ水準であり、ピーク時の半分である。

## 2. 「いたばしの学校」の現在

【参照資料】『教育要覧 平成 26 年版』（板橋区教育委員会）

### ①平成 26 年（2014）の学校数（公立）

小学校：（ 52 ）校 707 学級                      中学校：（ 23 ）校 271 学級

### ②平成 26 年（2014）の児童生徒数（公立）

小学校：21,562 人（1 クラス平均 30.5 人）    中学校：9,256 人（1 クラス平均 34.2 人）

〔参考〕第二のピーク（昭和 55 年）時の年齢構成との比較

【参照資料】『第 46 回板橋区の統計（平成 26 年度版）』

『国勢調査報告（板橋区分）昭和 55 年 10 月 1 日現在』

・人口総数	S55：498,266 人	H27：544,172 人
・年少人口（0～14 歳）	S55：101,998 人（20.5%）	H27：60,600 人（11.1%）
・老年人口（65 歳以上）	S55：34,703 人（7.0%）	H27：122,734 人（22.6%）

### ③新たな取り組みとしての「学校選択制」

【参考資料】『学校選択制検討会のまとめ』（2003 年）、

「学校選択制の見直しについて」（板橋区公式サイトより）

#### ・学校選択制の概要

学校選択制とは、通学区域外の学校に入学することを認める制度のこと。平成 16 年度（2004）の新入学児童生徒から開始された。

平成 9 年（1997）1 月に文部省から「通学区域制度の弾力的運用について」の通知があったことを受けて、板橋区でも平成 10 年度新入学児童生徒から「指定校変更制度」が導入されていたが、公平性の問題、学校決定が 2 月以降になるなどの問題があった。そこで保護者のニーズによりこたえることができるように導入されたのが学校選択制である。

#### ・学校選択制の目的

①保護者の責任に基づいた学校選択の意思を尊重することにより、子どもたち一人ひとりが自らに適した教育環境で、個性や能力を一層伸ばすことができるようにする。

②家庭・地域・学校が一体となりこれまで実施してきた「特色ある学校づくり」や「開かれた学校づくり」を一層推進し、更なる学校の活性化を図る。

③就学事務の円滑かつ適正な実施を図る。

#### ・学校選択制から入学予定校変更希望制へ

平成 21 年（2009）6 月、学校選択制検証検討会が設置され、学校選択制の見直しについての議論が始まる。そこでは、当初期待されていた「学校を自ら選択することに伴って、保護者がより積極的に教育や学校運営に参画するという効果」については十分とは言えないこと、大規模マンション建設などに伴う一部地域の人口増によって、通学区域外に居住して



いる児童生徒を受け入れできない学校も増えていること、逆に小規模化によって1学年1クラスになっている学校も出てきている（例えば平成24年度では小学校12校、中学校3校）ことなどから、見直しが必要だとの見解で一致した。

→そこで、「選択できる」という印象を与える「学校選択制」の名称を、入学予定校（通学区域内にある学校）がまずあって、希望すれば変更ができる制度であることを強調した「入学予定校変更希望制」に名称を変更し、平成26年度新入学児童生徒からこの新制度に移行している。

#### ④教育予算の実際

・区の予算総額（一般会計歳出総額）のうち、どれくらい教育費につかっているのか？

【参照資料】『教育要覧』S55年度、H16年度、H26年度

昭和51年度～55年度（1976～1980）の平均：22.3%

予算総額平均：554億977万円      教育費平均：123億3248万円

平成12年度～16年度（2000～2004）の平均：11.6%

予算総額平均：1593億3716万円      教育費平均：178億120万円

平成22年度～26年度（2010～2014）の平均：11.6%

予算総額平均：1840億1200万円      教育費平均：213億3391万円

☆昭和50年代前半期は、児童生徒数の増加に対応するべく、学校の新設、増築が相次いでいた。そのため教育費の占める割合が高くならざるを得なかった。

☆現在は、当時建てられた校舎が老朽化し、その改築が必要とされている。平成26年度教育予算202億7400万円のうち、15億1555万円が「学校の改築」にあてられている（『教育広報 いたばしの教育』85号）。

その他にも、「放課後子ども教室」と「学童クラブ」を一体的に運営する「あいキッズ」の改新拡大版である「新あいキッズ」事業に14億1686万円、ネットいじめ問題の早期発見のための「学校ネットパトロール事業」に213万円、給食のアレルギー対策をさらに進めるための事業に519万円が予算化されているなど、現代的な課題への対応もなされている。

### 3. 「いたばしの学校」の未来

【参照資料】

『いたばし魅力ある学校づくりプラン概要（平成26年2月）』（板橋区公式サイトより）

- ・小中学校のうち、建築後40年以上経過している学校は75校中（56）校
- ・建築後60年で改築すると仮定しても、2016年度から20年間で（61）校が改築
- ・だが年少人口は2035年には2010年比で約（20）%減少すると推計されている
- ・大幅な税収増はみこめない

→どうすればいい？

①壊れる前に補強する「予防保全」を計画的に進め、校舎の寿命を延ばし、改修改築の時期が集中しないようにする。

②学校統合によって学校の数を減らし、1学年1クラスしかないような学校をなくす。

例) 改築期にあるA校の改築計画を、隣接するB校、C校を含めて検討し、A校とB校を統合して改築し、C校はそのまま残す。

←これは、お金が限られている中で「魅力ある学校」をいたばしに残していくためには必要なことでもあります。

・・・以上、「いたばしの学校」の全体的な流れについて、その始まりから戦後の復興期、そして現在と未来まで見ていきました。ここで得られた情報を頭に残しておきつつ、個別の学校の歴史について調べていきましょう。